



武士は、どうやって力をつけたの



自分の土地を守るためにできた武士団が、源氏や平氏を親分とする大軍事組織をつくったからだよ。

土地開発を進める開発領主が現われた

11世紀から、豪族や、国司の任期を終えて住み着いた人の子孫、在庁官人（国府の下級役人）などが、土地開発を進めて、それを私有地とすることが、さかんになりました。これらの人々を、開発領主・根本領主などといいます。開発領主の中には、その土地を支配する権利や、年貢を納めなくてもよい権利（不輸権）を守るために、有力な貴族やお寺・神社に土地を寄進して、その荘園とし、自分は荘園の管理をまかされる荘官になる、という形をとる人が、たくさんいました。

土地を守るために、武士団がつくられた

開発領主が、このような形で、土地を確保しても、土地をめぐる争いをさけることができませんでした。そこで、土地を守るために、戦いのための集団（武士団）をつくるようになりました。さらに、その武士団の中で、主君と郎党という上下関係が生まれました。広い私有地をもつ豪族の中には、新しく現われて、武力で土地をうばうようになった開発領主を、自分の支配下におき、大武士団をつくったものもいました。

源氏と平氏が、大軍事組織の親分となった

武士団がたくさんできて、たがいに争うようになると、それぞれの武士団は、武力をもっと強くする必要にせまられました。そこで、「武門の棟りょう（親分）」とよばれる有力者に頼り、その軍事組織の一員となって、活動するようになりました。こうした世の中の動きを利用して、「武門の棟りょう」として大軍事組織をつくり、力を強めていったのが、東国の源氏と、西国の平氏なのです。